

LGBTの困りごと

40代 都島区 レズビアン 「レズビアン」同性を好きになる女性

彼女が事故にあった

私は親族じゃないから、連絡がこなかった



パートナーに何かあった時に、 連絡が来るような仕組みがほしいな

誰かが事故や病気で意識不明になったり、手術が必要になったりした場合、病院や警察は、まず法的な親族に連絡を取ろうとします。同性パートナーは、法的な親族ではないため、連絡をもらえなかったり、面会できなかったり、手術の同意書にサインできなかったりします。これは本当につらいことです。医療・介護に関しては、厚労省が2004年に策定した「個人情報の適切な取り扱いのためのガイドライン」があり、本人の申出があれば、家族以外でも病状説明の対象になります。自分が意識不明になった場合に備えて、連絡してほしい人を記載した「緊急連絡先カード」を持ち歩いている人もいます。日本看護協会は「看護者の倫理綱領」の中で、「国籍、人種民族、宗教、信条、年齢、性別及び性的指向、社会的地位、経済的状态、ライフスタイル、健康問題の性質にかかわらず、対象となる人々に平等に看護を提供する」とうたっています。LGBTであっても、安心して医療・介護を受けられる社会が求められています。

このパネルは、平成28年度 淀川区LGBT支援事業の一環として、大阪市内のLGBT当事者の声を集めて制作したものです。LGBTは、以下の4つの単語の頭文字であり、ここでは性的指向や性自認におけるマイノリティ(少数者)の総称としています。

L レズビアン 同性を好きになる女性 **G** ゲイ 同性を好きになる男性 **B** バイセクシュアル 性別にかかわらず、同性を好きになることもあれば異性を好きになることもある人 **T** トランスジェンダー 出生届の性別とは異なる性別のあり方を望む人

LGBTは人口の5~8%程度と言われていますが、学校、職場、地域など、自分の周囲にカミングアウトできない人も多く、見えにくいマイノリティです。このパネルは、そうした人たちの声を可視化する目的で制作しました。笑顔の裏にも見えにくい「困りごと」を抱えている人たちが自分の身の周りにもいるかもしれないと、想像しながら見てほしいと思います。

